第180号
平成21年6月10日

病院だより

International Goodwill Hospital

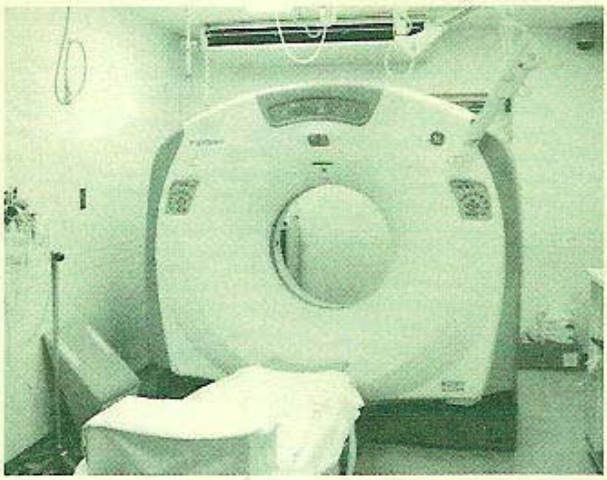
新しいＣＴ（ＭＤＣＴ）装置の導入　坂田　祐子
高齢者に多い急な吐血－胃かいよう－　有田　正裕
研修医とは・・・　高畑　創平

国際親善総合病院
〒245-0006 横浜市泉区西が岡 1-28-1
TEL 045(813)0221（代　表）
FAX 045(813)7419（庶務課）
URL http://shinzen.jp

新しいＣＴ（ＭＤＣＴ）装置の導入

この度、当院のＣＴ装置が新しくなり、マルチスライスＣＴ（ＭＤＣＴ）となりました。

ＣＴとは、Ｘ線を使って体の中を輪切りにしコンピュータで画像処理し、体の内部を観察する検査で脳出血や内臓のがん、骨折の診断などに有用です。いままでのＣＴでは一回転につき一枚の画像しか得られませんでしたが、ＭＤＣＴでは一回転で複数枚の画像が得られ、検査時間が短縮され、息を止める時間が短かくより楽になりました。今まで何回かに分けて息止めをしながら撮影していた部位も一回の息止めで済むようになり、さらに同部位・同条件のもとではＸ線の被曝量も減りました。



また、追加で細かく撮影が必要だったところも、ＭＤＣＴがもつ元データを再構成することで細かい画像の表示ができるので、この点でも被爆量が減らせます。体の断面または３Ｄグラフィックス（脳血管や関節）なども今までよりも範囲も広く、より細かく表示できるようになりました。

ＭＤＣＴ（16列）は５月中旬より稼働しておりますが７月中旬頃には、さらに高性能で心臓の血管もより鮮明に描出できるＭＤＣＴ（64列）も稼働予定です。

新しいＣＴの導入により短時間で、患者さんの検査の負担を軽減し、さらに診断や治療に貢献できると考えております。

中央放射線部　坂田　祐子

健康懇話会

高齢者に多い急な吐血

－胃かいよう－

胃は食べ物を消化するために、強酸性の胃酸や消化酵素を含む胃液を分泌しています。胃液には、食べ物だけでなく胃の粘膜を溶かすほどの消化力があるため、胃は粘液を分泌して粘膜の表面を覆い、粘膜を守っています。ところが、ピロリ菌、非ステロイド系消炎鎮痛薬、加齢による粘液分泌の減少、ストレスなどのさまざまな要因によって、胃液と粘液のバランスが崩れ、胃液によって胃壁が傷つけられることがあります。これが「胃潰瘍」です。傷が深くなるほど重症とされ、血管にまで及ぶと出血して、便に血が混じったりします。粘膜下の太い血管が破れたりして、大量に出血すると、吐血して止血処置が必要となることもあります。

胃潰瘍の代表的な症状には、「みぞおちの痛み」「吐き気」「胃のもたれ感」などがあります。しかし、高齢者の場合、「痛覚が鈍くなっている」「膝などの痛みを和らげるため、日常的に痛み止めを服用している」などの理由から、初期症状に気付きにくくなっていることがあり、知らない間に重症化して、突然吐血し、初めて胃潰瘍があることに気付くこともあるので、注意が必要です。

胃潰瘍は治りやすい一方、再発しやすい病気です。胃潰瘍を起こしたことのある人は、再び起こしやすいことを自覚し、ストレスをためない生活を心掛けましょう。また、胃の健康のためには、40歳以上になったら、年に一度は内視鏡検査を受けて、自分の胃の状態を把握するのが望ましいでしょう。胃癌の早期発見にもつながります。

消化器内科医長　有田　正裕

ご案内

このテーマは

平成21年7月10日（金）15：00～約1時間の健康懇話会にて講演予定です。

（入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。）

院内散策

研修医とは・・・

国際親善総合病院で研修医として働き始めて一年と少し、いろいろなことを学び、見えてきたこと、逆に見えなくなってきたことそれぞれを感じる今日このごろです。

今回は、我々研修医について、どういうものなのか、少しばかり紹介させて頂きます。

一般的に『研修医』とは、医師になってから初めの二年間を指します。どの職業にも「見習い」の期間があると思いますが、医師の場合も同様で「研修医＝見習い医師」ということになります。幅広い知識・経験を得るために、内科系・外科系・産婦人科・小児科・救急・精神科などを月単位で研修していきます。

大まかな部分は同じですが病院ごとにカリキュラム（研修課程）の違いがあるので、学生時代に自分の行きたい病院を探し、見学・実習し受験する・・・といった就職活動のようなことをしなければなりません。僕自身も二年前、真夏にスーツを着て、汗だくになりながらこの病院の試験を受けた懐かしい記憶があります。

研修病院が無事決まり、医学部卒業試験、医師国家試験で精神を大幅に削られながらも出来上がった研修医は、「見習い」と言っても医師であることに間違いありません。知識・技術そして経験は確かに不足していますが、患者さんの健康、命、人生が懸かった職業に就いているという自覚は誰もが持っています。様々な場面で、研修医が対応することに不安を感じる方もいらして当然だと思いますが、まずは「医師と患者」ではなく「人と人」として話をさせて下さい。我々研修医は、教科書よりも、指導医の先生方よりも、患者さんの笑顔に育てられて一人前になっていきます。名札に「研修医」と書いてあったら、まずは、「話し相手がきた」と思って頂ければ幸いです。

研修医　高畑 創平